

『真夏の死』の世界

——敗戦のイメージを中心に——

西 本 匡 克

一

三島由紀夫の短編小説『真夏の死』は、昭和二十七年十月、雑誌『新潮』に発表された。作者二十七歳の作品である。作者は前年（昭和二十六年）十二月、父の旧友であった朝日新聞出版局長の嘉治隆一氏の尽力により、朝日新聞特別通信員の資格で、北米に向け、横浜より出発し、南米ブラジル、パリ、ロンドン、ギリシャ及びローマを巡る世界一周の約半年間の旅を終え、翌年（昭和二十七年）五月に帰国している。彼が旅に出た昭和二十六年は、朝鮮戦争二年目、日米講和条約調印の年である。国際的には戦争の不安と緊迫した情勢下にありながら、占領時代も終わり、丁度戦後の混乱期の終末を象徴するかの如く、戦後の代表的な雑誌『人間』『展望』『日本評論』が廃刊、休刊となり、文学の上でも「戦後は終わった」の感を抱かせた。しかし、第二次戦後派といわれる大岡昇平、三島由紀夫、安部公房等の活躍した年でもある。

特に三島にとってこの世界旅行、とりわけ憧れのギリシャにおもむく事で、彼自身の何らかの自己改造の必要を痛

切に感じとり、作家的飛躍を、この海外旅行にかけたのである。作者は、『私の遍歴時代』の中で、次のように語っている。

私は暗い洞穴から出て、はじめて太陽を発見した思ひだった。生れてはじめて私は太陽と握手した。いかに永いあひだ。私は太陽に対する親近感を、自分の裡に殺してきたことだらう。そして日がな一日、日光を浴びながら、私は自分の改造といふことを考へはじめた^①。

又、

私はあこがれのギリシャに在って、終日ただ酔ふがごとき心地がしてゐた。古代ギリシャは「精神」などではなく、肉体と知性の均衡だけがあつて、「精神」こそキリスト教のいまはしい発明だ、といふのが私の考えであつた。もちろんこの均衡はすぐ破れかかるが、破れまいとする緊張に美しがあり、人間意志の傲慢がいつも罰せられることになるギリシャの悲劇は、かかる均衡への教訓だつたと思はれた。ギリシャの都市国家群はそのまま一種の宗教国家であつたが、神々は人間的均衡の破れるのをたえず見張つてをり、従つて、信仰はそこではキリスト教のやうな「人間的問題」ではなかつた。人間の問題は此岸にしかなかつたのだ。かういふ考へは、必ずしも、古代ギリシャ思想の正確な解釈とは言へまいが、当時の私の見たギリシャとは正にこのやうなものであり、私の必要としたギリシャはさういふものだった。私は自分の古典主義的傾向の帰結をここに見出した^②。

帰国後の三島にとって、ギリシャ体験は二つの意味があつた。一つは、アポロ的世界「肉体讚美」への憧憬であり、もう一つは、古代ローマの廃墟や地中海の中に、日本の敗戦のイメージの幻影化である。前者は『潮騒』の世界であり、後者はこの『真夏の死』の世界であるといえよう。

当時の外遊は、今から考えれば想像も出来ない程むつかしいものであつたらしく、それ故に、作家が外遊すると、「おみやげ小説」なるものを出版社から要求され、作者はそんな安易な観光案内小説のようなものは書くまいと決心して、多くの原稿依頼を断わり、数ヶ月を心の準備に費やし、「純然たる日本の出来事の小説^③」を帰国後、自信を

持って世に発表したのが、『真夏の死』一編である。作者は、第一回のこの世界旅行の中で、日本の敗戦のイメージの再確認をなしたのである。アメリカ風や、ギリシャ風の「おみやげ小説」の否定をなし、特に、「純然たる日本の小説」と銘うっている点を注目しなければならない。

註(1) 三島由紀夫全集第三十巻 新潮社「私の遍歴時代」四七二頁

(2) 右同 四七四頁

(3) 右同 四七五頁

二

本節では、この作品の構造・展開・主題を説明してゆきたい。

生田家は、東京の田園調布という閑静な住宅地に一家をかまえ、良人の生田勝は三十五歳、外語を卒業して、堪能な語学力と仕事の手腕が認められ、米国の自動車会社の日本代理店の支配人^{いくたまさ}をしている。収入は月十五万円、当時としては相当な高級サラリーマンである。妻朝子^{ともこ}、東京の良家の出である。年令は三十歳前後^だだろう。三児の母である。六歳の長男清雄を頭に五歳の長女啓子、三歳の次男克雄、良人の妹の安枝、彼女は朝子よりも年上で婚期のおくれた老嬢であり、郷里金沢から上京し、勝一家に身を寄せ、家事や子供の守を手伝うかたわら兄に洋裁を習わしてもらっている。この家族構成や、ムードは三島好みの有産階級で少ない人物構成とやや貴族趣味的な要素をのぞかせている。良人勝は、「地方の豪家の次男に生れ、今は亡い伯父の家で中学時代から東京の教育をうけ、豊かな仕送りのために他人の飯という感じを一度も知らず、戦争中も情報局に勤めて兵役を免かれ、東京の良家の娘を妻にもらい、

分家をして一家を成し、戦後は思いがけない地位に坐った⁽⁴⁾（一五六頁）男である。何不自由なく順境に育った彼は、「世間並の人間のうちに、最も運のいい、最も腕のいい男の一人と自分を認めている」（一五六頁）のである。妻朝子にしても三人の子宝に恵まれ、多忙だが楽しい毎日を送っていたことだろう。

作者は一見何の事件も起りそうにない幸福そのものである生田家の状況設定をなし、良人の留守に妻と子供達とその伯母が一夏のレジャーを楽しみに来た海水浴場での悲劇から舞台は始まるのである。作者は新潮文庫版『真夏の死』解説のなかで次のように語っている。

『真夏の死』（一九五二年）は、今度の集中もつとも長い百枚のノヴェレットで、第一回の世界旅行から帰って、ゆっくり筆馴らしをして書いた作品である。伊豆今井浜で実際に起った事件を人から聞き、それを基にして組み立てた小説だが、もちろん眼目は最後の一行にある。方法論としては、この一点を頂点とした円錐体をわざと逆様に立てたような、普通の小説の逆構成を考えた。即ち通常の意味での破局が冒頭にあり、しかもその破局には何の必然性もない。その必然性としての宿命が暗示されるのは最後の一行であり、これがギリシャ劇なら、最後の一行からはじまって冒頭の破局を結末とすべきである。それをわざわざ逆様に立ててみせたのである。即ち、通常の小説ならラストに来るべき悲劇がはじめに極限的な形が示され、生き残った女主人公朝子がこの全く理不尽な悲劇からいかなる衝撃を受け、しかも徐々たる時の経過の恵みによつていかにこれから癒え、癒えきつたのちのおそろべき空虚から、いかにしてふたたび宿命の到来を要請するか、というのが一編の主題である。或る苛酷な怖ろしい宿命を永い時間をかけてようやく日常生活のこまかい網目の中へ融解し去ることに成功したとき、人間は再び宿命に飢えはじめる。このプロセスが、どうして読者にできるだけ退屈を与えずに描き出せるか、という点に私の腕だめしがあった。小説のはじめに最も刺激的な場面を使つてしまえば、そのあと、読者は何ら刺激を受けなくなつてしまう惧れがあるからである。（二八四頁）

やや長い引用文であるが、この中には、この作品の主題と方法が作者自らの手で意を尽くされているのである。午睡中に、二人の子供と、義理の妹安枝とを一度に海に吞まれて失った朝子と良人勝のショッピングな事件を作者は最初に設定し、克明に描写してゆく、読者は朝子の境遇に同情を寄せずにはいられないのである。そして作者は、事件

後の二年間を朝子を中心として必要以上に彼女の心理に迫つてゆくのである。又、夫婦間の微妙な心理的交渉に大部分のページをさいている。良人勝は事件を知ったその日には、「自分を一枚加えずに、知らないところで事件が突発し、自分一人が置き去りにされている不満」（一五六頁）を感じ、彼の「虚栄心は……（中略）自分が人の目に不幸な悲しめる父と映るのを好み、彼ほどの手腕も生活力もある男が、こういう不幸に参っている図は、人の嫉妬を滅殺する効能があるのみならず、強者の弱点というロマネスクな魅力をも成立たせる筈である」（一七一頁）と作者は皮肉な分析を試みている。又、作者は、二人の子供を失くした朝子の描写にしても、「安枝さんは死んだから得をなすった。」（一六一頁）あたくしこそ被害者だということをどうして誰もわかつてくれないんでしょう。（一六一頁）とか涙を流し悲惨ぶっているが食欲は一向におとろえない女性として描き出し、朝子や勝のエゴイズムをシニカルな視線で冷酷に浮彫りにさせている。一見すれば、この小説の主目的は不幸な母親の心理分析がいかに癒やされていくかという道徳的な追求におかれているように見えるが、実はその裏に潜む、不幸の代償を求めるエゴイズムの影をみる事が出来よう。作者は、「どんな死でもあれ、死は一種の事務的な手續である。」（一六十頁）とか、「朝子は自分の悲しみを育てている。」（一六六頁）とか、「その泣顔には棘々^{とげとげ}しさの代りに、一種の平和があった。」（一六七頁）又「悲しみは最もエゴイスチックな感情だからである。」（一七五頁）等、我が子を失った親の感情の動きとしては決してリアルなものでないクールなタッチで、意識的、分析的に朝子の周辺を描いてゆくのである。丁度、二年前に書かれた『愛の渴き』の女主人公「悦子」のように、何か一心にうち込む「思いやり」が必要だったのである。その「思いやり」が、生き残った克雄に対する言愛となり、彼女の衣裳通菜へと進み、昔の学校友達との少女歌劇の観劇となり、又、洋裁を習い始め、ミシンを踏んでいる時には不幸な自分の存在を忘れていたのである。しかし、この曖昧模糊とした悲しみの実体がどこにあるのか彼女は、はっきりとみきわめようと欲するのである。朝子は「事件に直面したときの自分の感情の反応に、不満をおぼえざるをえない。」（一八七頁）のであり、あれ「以来、朝子が味わった絶

望は、単純なものではなかった。あれほどの不幸に遭いながら、氣違ひにならないという絶望、まだ正氣のままでいるという絶望。」（一八六頁）その絶望の本質を探ろうとするのである。やがて時が経過する。時の流れと共に、その意識は忘却の彼方へと追いやられんとするのである。「事件は漂流者が船の残骸と別れるように」（一九十頁）「遠く岬の燈台の灯のように燈っていた」（一九一頁）のである。朝子の懷妊がこの退屈への過程を助け、再び日常生活の自然な時が流れる。事件があつて一年後、朝子は、女兒桃子を出産する。そして又、夏が巡つて来た。あれから二年目の夏のことである。丁度、犯罪者が犯行現場をもう一度見たいという心理の様に、あの海岸へ行つてみたいという奇妙な衝動にかられるのである。作者は、桃子が生れたあたりから急ピッチで最後の一行へと朝子を追い込んでゆく。三好行雄との対談の中で、作者自らが語る如く、「最後の一行がピシッーと決まらなければ書き出さない……」⁽⁹⁾という作者の見事ともいふべき周到な計算に従つて筋は最後の一行へと展開されてゆく、勝、朝子夫婦と子供達、克雄、桃子の四人は、あのいまわしい二年前に三人の生命を奪つた伊豆のA海岸の波打際に立止るのである。作者はその場面面で夏空の印象的な描写を試みている。

沖には今日も影じい夏雲がある。雲は雲の上に累積している。これほどの重い光りに満ちた莊嚴な質量が、空中に浮かんているのが異様に思われる。その上部の青い空には、箒で掃いたあとのような軽やかな雲が潤達に延び、水平線上にわたかまつているこの鬱積した雲を蹴下ろしている。下部の積雲は何ものかに耐えている。光りと影の過剰を形態で覆い、いわば暗い不定形な情欲を明い音楽の建築的な意志でもつて引締めているように思われる。（一九六頁）

この夏空の描写は田坂昂氏の指摘にもある如く⁽¹⁰⁾、単なる風景描写だけではなく、三島文芸の根底にある不定形な情欲であり、何ものかに耐えている朝子の心理でもあり、作者自身でもあるといえよう。勝はかたわらの朝子を見て、「お前は今、一体何を待っているのだい」（一九六頁）と尋ねる。こうなれば彼女の待っているのは何なのかは明白である。作者の言葉を借りれば、「ふたたび、宿命の到来の要請」であり、題名の横に掲げられた、サブタイトル

である。

夏の豪華な真盛の間には、われらはより深く死に動かされる。(一四三頁)

というボードレールの「人工楽園」の一節と対応し合う。作品中にも作者は、朝子をして、

夏という言葉そのものが、死と^{びらん}魔爛の聯想を伴っていた。かがやかしい晩夏の光りには魔爛の火^ほ照りがあった。(一六四～一六五頁)

と言わせており、その事はいみじくも、三島自身が敗戦の日を契機にして、強烈に味わったあの△夏▽の△死▽のイメージの追体験ではなからうか、それは危機に直面してのみ実感しうる存在感、生の純粋化であり、初期の作品から三島が一貫して試行してきたものである。磯田光一氏の指摘の如く、

現実の「人生」が不完全かつ曖昧なもので、華麗な「死」においてこそ「美」と「完成」が具現する⁽⁴⁾。

という三島文芸に於ける基本テーマの一つであるだろう。戦争中の動乱の中に召集をうけ、死をかけた戦いの情念、医師の誤診による即日帰郷という運命に出逢った三島氏は、御国の為に命を投げ出す純粹なあの時の心境を、再びみつめようとしたのではあるまいか、日本の敗戦という事実を知った時のあの挫折感、青年三島にとってはあまりにも大きすぎたのであり、戦後の繁栄と平和な日常生活が安定し確立したこの昭和二十七年の小市民社会の中に、敗戦の夏の日の沸き立つ入道雲の中に、ギリシャのエーゲ海の中に、海をバックにこの逆なでするような逆構成の知的場面の中に、△死▽をダブルイメージ化して形象化したのかも知れない。確かに『真夏の死』一編は、局限状況に於ける生の実在感であり、死を描く事によって生の現象的な意味を探ろうとするものであると言えよう。死によって、生を可能ならしめるという論理は、三島氏そのものの氣質と体験の見事な結晶であり、驚くべき事は、三島由紀夫全集、第六卷(新潮社)の「真夏の死」の最後の頁、(四五十頁)によれば、

——一九五二・八・一五——と日附が打たれてあり、この脱稿の月日は何を物語っているのだろうか、……

まさしく、三島にとって敗戦のイメージの再確認に他ならない。

註(1) 三島由紀夫著「真夏の死」―自選短編集―(新潮文庫)による。以下作品の引用はすべて新潮文庫を参考とし、()内に頁数のみ記入した。

(2) 「国文学」昭和四十五年五月臨時増刊 学燈社(三島由紀夫のすべて)二九頁参照、三島文学の背景というテーマで、三好行雄と、過去の戦争体験や、文体論芸術論を体談している、その中で創作方法について三好氏が質問したのに対し、このように答えている。このセリフの後に、芝居は、ことにそうですね、とつけ加えている。

(3) 田坂昂著「三島由紀夫論」風濤社 一八〇頁に「作者本然の抒情的心象風景であるにちがいない……中略……夏の海と沖の雲にも似た予兆をはらんだ心象風景を想起させる、これは作者みずからの暗い情念の抒情なのではないか」との指摘がある。

(4) 磯田光一著「殉教の美学」冬樹社「三島由紀夫と現代」より引用者要約。

三

ところで、この『真夏の死』一編の評価はどうであったのか、考えてみよう。雑誌発表の翌月(昭和二十七年十一月)の「群像」創作合評で採り上げられ⁽¹⁾、平野謙氏は、「ぼくはなかなかいい小説だと思いました。…中略…困難なテーマにぶつかってひるんでいない」と評価を下し、高橋義孝氏は「時間と人間の事件、三島さんはこの三つの関係を直覚的につかんでいるものがあって、それを何とか言おうとしたんじゃないか」、又、大岡昇平氏は、「三島さんとしてはむしろ才気を消した割合おとなしい作品(略)なるほどうまいものだと思った。」と好評をもって迎えられている。又、にせナルシズムの文学と称し、彼の作品のどこに抒情的な美しさが、美的な感動があるであろうか、と三島の初期の作品をあまり高く評価をしない奥野健男氏も「彼の浪漫的美感と分析的な手法とが、諷らしくも調和

した傑作だ⁽⁴⁾」と指摘されている。一方、松本徹氏は「あまりすぐれた作品だとは評価し難い。肝心の「死」が錯誤に満ちた観念的な言葉で曖昧に語られるにとどまってるのである。⁽⁵⁾」寺田透氏も同様に論理的混乱であると仲々手きびしく評価を下す三島文芸の否定者の一人である。しかし、三島文芸の特質は、一瞬一瞬、一行一行を知性と感性の鋭い切り結びによって形成されており、感性的響きを注視しているのであり、論理的、意味的に誤った文章を指摘しだすときりがなく、その唯美的な文体や、アフォリズムものに彼の特質がひそんでいるのである。確かに、三島の小説の題材やテーマの範囲は驚くほど狭い「テーマ」や「美」は限定され、それ以外の広い人間としての課題、例えば、倫理の問題や、神不在、「社会や人生をいかに生きるか」「いかに苦悩するのか」という問題が欠落しているかも知れない。描く社会も有産階級に限られ、貧乏人など登場しないのであり、現実の厳しさをくぐっていない彼の考えや理想は現代文学としてのフアクターの欠如であるとの見方が一方では成立するが、リアリズムの文芸だけが文芸ではなく、彼の人工的虚構による美的世界は我々に小説の面白さを見せてくれるのである。

この『真夏の死』一編は、三島の人工的構図の中に、勝に代表される通俗的概念と朝子に代表される純粹的概念の対立をみる事が出来、希望と絶望、善と悪、生と死の共存したまさしく人生そのものを見つめた作者の視点がみられるのである。知識のひけらかしや、無用な説明、装飾過剰等の欠点はみられるにしても、佳作である事に違いなからう。昭二十四年に「仮面の告白」を発表し、翌年（二十五年）「愛の渇き」で作家としての地位を確立し、この「真夏の死」から「潮騒」「金閣寺」へと作家として着々と飛躍してゆく一つの契機になった作品ではなからうか△夏△、△海△、△死△が知的に構成され、強烈な敗戦のイメージが色濃くにじみ出ている作品であり、そこに作者三島の戦後は終わったという意識がみられよう。

註(1) 長谷川泉編「三島由紀夫」―現代のエスプリ―至文堂 三島由紀夫作品事典(二二頁転載)

(2) 日本文学研究資料叢書「三島由紀夫」有精堂 奥野健男「三島由紀夫論」―にせナルシズムの文学―三六頁

(3) 松本徹著「三島由紀夫論」朝日出版社 一〇九頁

(4) この論稿の敗戦のイメージについては三島文芸研究者としての大先輩山口昌男氏にヒントをいただいたことを感謝すると共に、ここに付記しておきたい。

その他参考文献

野口武彦著「三島由紀夫の世界」講談社

長谷川泉 森安理文編「三島由紀夫研究」右文書院